

第7回 薬用植物シンポジウム
講演と薬用植物園見学会
世界の薬用植物とその利用法

'05.6/4sat
PM1:00-6:00

北里大学相模原キャンパス
講義棟(L3号館 4F 409)



健康・環境・都市農業の視点
での薬用植物の活用を目指し、広く薬用
植物に関する普及啓発を図るため、アジ
ア及び本邦の薬用植物の活用に関するシン
ポジウムを開催いたします。

講演会プログラム

| | |
|---|---|
| ●10:30-11:30 開会式 北里大学相模原キャンパス 講義棟(L3号館 4F 409) | ●11:30-12:00 講演1 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 |
| ●12:00-12:30 講演2 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 | ●12:30-13:00 講演3 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 |
| ●13:00-13:30 講演4 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 | ●13:30-14:00 講演5 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 |
| ●14:00-14:30 講演6 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 | ●14:30-15:00 講演7 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 |
| ●15:00-15:30 講演8 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 | ●15:30-16:00 講演9 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 |
| ●16:00-16:30 講演10 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 | ●16:30-17:00 講演11 世界の薬用植物の活用を目指し、広く薬用植物に関する普及啓発を図るため、アジア及び本邦の薬用植物の活用に関するシンポジウムを開催いたします。 |

第7回薬用植物シンポジウム 「世界の薬用植物とその利用法」
日時 平成17年6月4日(土) 午後1時～午後6時
場所 北里大学相模原キャンパス 講義棟(L3号館 4F 409)
対象 一般県民・市民及び大学生 ～参加費無料～

エコプロダクツ2005年出展
日時 平成17年12月15日(木)・16日(金)・17日(土)
場所 東京ビックサイト(東展示場4・5・6ホール)
対象 一般入場者

サンシャインひるがのヴィレッジ・自然と交流できる文化人村を開設準備中
植物の絶滅危惧種や人類の未来に不可欠な、ヒマラヤの野生植物などで
手に入りにくくなった植物を“希少植物”と呼ぶことにします。これらを保存す
るために、岐阜県郡上市のひるがの高原に、自然と交流できる文化人村を開
設準備中です。各オーナーは、希少植物保存会、地球環境保全に理解があ
り、いろいろご協力いただくことになっています。
当法人社員(株)トウメイハウス顧問 秋濱友也

新規入会、ご継続更新の皆様ありがとうございました。

法人会員様(敬称略・順不同)
株式会社資生堂 株式会社トウメイハウス 株式会社ヤクルト本社
丸善製薬株式会社 ハイパーブランド株式会社 有限会社ウィル研究所

個人会員様(敬称略・順不同)
秋濱友也 川口基一郎 郷田浩志 小島美佐 田中照子 蓮沼良一
圓山徳栄 三澤 薫 松田ふみ子 矢原正治 吉川孝文 渡邊高志
渡辺 保 堀田ルミ子 田淵まこと 市村二郎 加藤千晶
クベル・ジャン・マラ 坂本真理子 眞部信次 山根典子 大橋則久 都築伸匡


編集後記 ~ピカピカの1年生~

事務局オフィスの近くにある小学校に通う1年生。どこから見ても初々しい。
横断歩道で挙げる手にも力がこもり、真剣そのものだ。
そう言えば、我々もNPO1年生。ピカピカとまでは行かないけれど
何をするにも、遠足の前夜のように、そわそわしてしまう。
五月の新緑たちも、そわそわしているのだろうか？
自然環境に守られたこの地で、初心を忘れずしっかり育てほしい、
子どもとNPOの1年生そして若葉たち。(KM)

~ひと粒の種から始まります~

新会員募集! **eGGAO**

アーユルシードへのご要望・お問い合わせは下記事務局まで。 発行人 松田ふみ子 編集人 渡邊高志

 NPO 特定非営利活動法人 アーユルシード生活環境研究所
事務局 〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯1022
TEL/FAX 0463-61-5139
E-mail ayurseed@labotany.com
URL http://www.labotany.com/ayurseed/

NPO-AYURSEED Life Environmental Institute
Branch Office : 1022, Oiso, Oisomachi, Nakagun, Kanagawa 255-0003, Japan
Phone/Fax : +81-463-61-5139 E-mail: ayurseed@labotany.com
URL : http://www.labotany.com/ayurseed/

NPO アーユルシード生活環境研究所機関誌

世界のすべての人々が笑顔で暮らせる環境を

Index

- ごあいさつ 代表理事 松田 ふみ子 1
- ネパール体験記『ネパールに思いをよせて』 代表理事 松田 ふみ子 1
- 自然の恵みで Product する 理事 田中 照子 2
- 「Fair trade shop」を運営して 理事 小島 美佐 2
- フェアトレードに関わって... 理事 小島 美佐 3
- 書籍発刊によせて 副代表理事 渡邊 高志 4



メコノプシス・ホリドゥラ
Meconopsis horridula

ヒマラヤの青いケシを代表する種類。
ヒマラヤ山脈の奥地に咲く“幻の花”と呼ばれ、妖精
のように薄い花びらを持った花。解熱作用を有する
薬用植物としてチベット伝統医に利用される。
標高3000~5800mに分布し、花期は7月~8月。



ごあいさつ

皆様、こんにちは。

平素は、当アーユルシードの活動にご理解と温かいご支援を戴き心より御礼申し上げます。

NPOアーユルシード生活環境研究所代表理事の松田ふみ子です。当NPOでは、この地球市民であるすべての人々が“笑顔で暮らせるように”自然の恵みを生かし、自然の恵みに生かされる活動を会員であるパートナーの皆様方と推進して行かせていただきたいと思います。

今般、ようやく第1号のNews Letterを皆様にお届け致します。日頃の活動報告、諸々のご案内と今後も情報を発信して参ります。また、会員の皆様の大いなる参画も期待しております。



ネパール体験記『ネパールに思いをよせて』

代表理事 松田 ふみ子

生活と便利感、都心に馴れた生活をしていると、仕事優先、合理性優先の生活に流されていく気がします。私にとって、ネパールへの訪問はそんな気づきをさせてもらえる国でした。それは、雄大な大自然のなかで、生かされている全ての”生命”は、人や動物も生命の一部という体験でした。心や体を感じたことを、表現できることの素晴らしさ・・・都会のなかで育つた私だから感じたカルチャーショックでした。

たとえば、家電製品が無い生活はどんな感じですか？ 不便ではありますが、ネパールでは、冷蔵庫がない家庭がほとんどです。私の友人のシェルパのレストランでも冷蔵庫がないので毎日市場に仕入れに行きます。市場では、野菜の鮮度が優先されるので、毎日日替わりメニューのように食材が変わります。新鮮なお豆を使った前菜のような物やプレーンオムレツは何回も食べ続けたほど、おいしかったです。ネパールの野菜は元気でなんだか嬉しそうに感じました。

また、ネパールでお世話になっているフェアトレードを推進しているある会社に打ち合わせに行ったところ、その会社では、現場で働く多くの人々が文盲の方たちでした。オーナーのリタさんの立場から考えると急ぐ仕事があるときは、不便も感じるようですが、働いている人々の、のびのびとした優しい笑顔を見ていると、何とものどかな気分になり、余裕を持って仕事ができることの大切さを痛感しました。出来上がってくるものも、気のせいかもしれませんが、満ちあふれている気がします。

現在、ネパールにエベレスト登山や山岳地域へのトレッキングの訪問者が政情不安(反政府思想を持つマウイストの問題)のため、年々減っているため、生活が立ちゆかなくなり始めている傾向にあります。しかし、ネパール人は、元来オープンマインドなのでのんびりと暮らしています。自然界がもたらす人びとへの”心と体”に対する影響は、物質という次元を超え、私たちの霊性をも育む、無条件の愛を持った大地の母のエネルギーのようでした。

最後に、ナガルコットの山小屋で仲間と見た、美しい黄金色に輝く朝日、そして、神様の使者のように見えた、一匹の小屋に迷い込んだ蜚、時間を掛けて薪で火を起し、オーガニックの畑で育てた野菜を使い、友人が作ってくれたネパール料理の”ダルバート”など、全てに感謝の気持ちを込めて、”ありがとう”の言葉で締めくりたいと思います。



フェアトレードに関わって...

理事 小島 美佐

私は、アフリカ諸国とのフェアトレード(国際協力につながる草の根の貿易)を生業としてしていますので、年に数回、アフリカを訪れています。今年も、3月22日から4月8日まで、エジプト、ナイジェリアへ出張しました。

豊かな大自然と、人々の大らかな生命力に溢れるアフリカ。人類のルーツはアフリカで生まれたといわれるだけの人々の生命力に圧倒され、人々は様々なトラブルから縁遠いように見受けられます。しかし、アフリカ大陸の人口の約4分の1を占める1億2千万人のナイジェリア人のうち、約10%がポリオや交通事故による障害者であったり、U.S.AIDによると、アフリカ19カ国において、2015年までに、HIV遺児数は、15歳未満の子どもの約16%にも昇るとされていたり、自然界の本来の秩序と矛盾する、アフリカ 内包する諸問題は深刻です。そのような状況下で、自分が微力ながらも問題解決に関わっていきたい。それが、私がアフリカでフェアトレードを続ける動機となっています。

フェアトレードとは、1950年代に、当時、人々が飢餓状態にあったバングラデシュの貧困救済のために、欧米のNGOにより、援助活動の一環として始まりました。物資援助や募金と異なり、現地で作られている品々をNGO等を介して草の根で取引することは、「与えるもの、与えられるもの」といった上下関係を作らず対等なパートナーシップを生産者と消費者が築けると共に、取引が続く限り、継続的な支援を、生産者に対して提供することができます。50年代の途上国の政治的リーダー達が声を上げた、「援助より貿易を」という「ドゴール宣言」のスローガンをご存知の方も多いかと思いますが、フェアトレードは、そのようなスローガンに呼応する形で欧米で草の根レベルにて広がってゆきました。現在、欧米では、統一のフェアトレード認証マークが作られるなど、定義も確立しつつあり、スーパーなどのマスの流通でも販売され、気軽に消費者が国際協力できる手段として、市民権を得つつあります。

私の会社『DAPO合資会社』では、アフリカから、約100アイテムを輸入していますが、今回は、相模大野の一時出店でも人気を博した、藍染めTシャツに関して、ご紹介します。ナイジェリア西部の熱帯雨林気候の地域では、昔から地元で、Eluと呼ばれる藍での手染めが盛んでした。しかし、現在では、化学染料や機械プリントにおされ、藍染めは殆ど行われていません。ナイジェリアで、藍の染めで有名な、アベオクタという街に出向きましたが、50%藍、50%化学染料で染めた、「単なる青い布」が軒先に並んでいます。これでは、昔ながらの藍による防虫効果が期待できないどころか、去年、来日時に国連大学においてコナレAU委員長が発言した、「アフリカは、世界のゴミ箱」という酷評のとおり、先進国の基準を満たさない、アゾに代表される発がん性分などがアフリカの市場で在庫処分されているため、染め手の人体への影響や環境負荷が心配です。私が生産者の方々にお願いしている藍染めTシャツは、もちろん本藍100%です。藍玉を一夜水に浸して、つけ置きしなければならぬ等、手間がかかるため、生産者は、化学染料を入れてよいかと聞いてきます。その都度、本藍で染める意義を根気強く話し合っています。結果、少しずつですが、発注の回を重ねるごとに、よいものが仕上がってきているようです。

21世紀のフェアトレードは、国際的なネットワークが広がっています。現場での活動は、相変わらずこつこつと地味な作業です。でも、生産者と一つの製品を共に作っているという実感は、ほかの手法の貿易では味わえない醍醐味なのです。



自然の恵みで Product する

理事 田中 照子

今の日本は使い捨ての物が多く、長く愛用するものが少なく思えます。商品、そしてパッケージ・・・ゴミの分別もしづらくゴミも増え、環境=人間=動物=植物も悪化し、いろいろな面でも病気が増えてきています。

まず、人間=自分自身、家族、友人、知人、世の中の人々が健康で気持ちも豊かに笑顔でいられるのが一番です。そのためには、食べる物、着る物、使う物がより自然素材で、NPO活動の中でヒマラヤやアマゾンエネルギーのある植物を利用し商品作りに役立てたいと思っています。

NPOアーユルシードに参加して1年が経ち、やっと本来の参加目的である現地とNPO、NPOと企業のフェアトレードに繋げる企画の仕事を推進することになりました。現在、元無印良品の役員のO氏と今秋1店舗スタート予定の新ブランドも木糸土(もくしど)の全体をコーディネートすることになりました。木(木、草、雑木、紙)糸(植物、動物、繊維)土(陶器・磁器・ガラス・石・金属)のナチュラルマテリアル・・・自然の素材の本来持っている良さ、エネルギーをそのまま楽しむこと。自然の本質的な素材、形を感じる・遊ぶ・使いこなすことをテーマにし、時にはやさしさや和み、むくもり、自然の守れる力を感動を、循環を与えてくれる製品を目指しており、アーユルシードと共に成功させたいと思っています。その他大手小売業の新ブランドの商品開発にもアーユルシードを取り入れる計画をしております。

参考:「木糸土」HP <http://www.mokushido.com/8cart/>



Ayurseed相模大野店

「Fair trade shop」を運営して

理事 小島 美佐

2月27日から4月30日まで、相模大野駅の駅ビル、小田急ステーションスクエア内にて、フェアトレードショップを運営して『Ayurseed』のお店を出店しました。フェアトレードに関心を持つ、デイベロッパである(株)ステーションスクエアのご担当様より、出店のお話がありましたがAyurseedは、設立からその当時一年も経っていない、生まれたてのひよこのような状況でした。しかし、「子育て中の母親が多く来店する商業施設の中で、フェアトレードを通じてお客様が世界と繋がってほしい」という、小田急のご担当者の高い意識と熱意にも感動し、なんとかAyurseedが得意とするボタニカルな世界観やフェアトレードを一般消費者に紹介するべく、理事会の了承を得て、出店することになりました。

突然の小田急様側からのオファーということもあり、準備期間も少なくAyurseedのフェアトレードのオリジナルのアイテムが開発途中というような状態で、すべてが試行錯誤の中で、約2ヶ月の営業を終えることができたのはレイアウトや搬入などを手伝ってくださった理事有志の皆様やボランティアの皆様のお力添えあってのことでした。この場を借りて、お礼申し上げます。営業期間中は、約350名のお客様にご購入いただき、「相模大野にフェアトレードショップができて嬉しい」「植物の品に囲まれて落ち着きますね」といったコメントも多くいただきました。特に、お客さまからの植物性の品へのご関心は、Ayurseed設立の趣意にも近く、今回、ショップ運営を通じて、趣意を具現化することに少しでも貢献ができたことを嬉しく思います。また、NPO関係者だけでなく、小田急のようなデイベロッパのご担当者や、消費者の中からも、フェアトレードをサポートしようとする意識が芽生えていることを実感し、きっとマスの流通にも、将来的にフェアトレードの品が乗ってゆくのではないかと希望を感じることができました。残すところは、売り上げです。今回は準備期間も足りなくトライアル的な要素が強い出店でしたが、事業性を持たせた、継続的なショップ運営により、生産者の支援を実現できるよう、次回、このような機会があれば、取り組んでゆきたい所存です。



A5判・278頁(カラー頁218頁)・平綴・英語版
定価3,570円(税込)/会員価格2,500円(税込)
詳しくは事務局までお問い合わせください。

書籍発刊によせて

副代表理事 渡邊 高志

万年雪に覆われた世界の屋根をもつヒマラヤの国での草の根活動を始め今年で23年になろうとしています。ネパールには森林土壌保全省薬用植物局(現、植物資源局)発行の「ネパールの薬用植物」(1960)等があるが、19世紀末ネパール秘蔵の「ビル・ニガントウ」という当時の宰相が制作に大変こだわったという草本図譜のことが知られています。私は、かねがね一般市民や学生等研究機関で働く人々を対象にしたヒマラヤ産薬用植物の本を出版したいと考えてきた。アーユルシード生活環境研究所が当初計画していた事業として、昨年ようやく「ネパール産薬用植物ハンドブック」を世に送り出す目処がたったのでここで少し紹介したいと思います。この本の特徴は、単なる学術書ではなく、ヒマラヤの人々に活用してもらうためにも掲載される108種(煩悩の数)の植物のネパール名を全て現地のデヴァナガリー文字で記載し、現物写真を多く取り入れることにより、フィールドに持ち歩き便利なハンディタイプの本を目指しました。専門的な知識を構築するうえで必要な最新の文献や主な成分の化学構造式、さらに私のフィールド調査日記から拾い上げたデータや最新のGPSを駆使したさく葉標本のデータを整理することでオリジナル性の高い分布図を作製し、記載しました。

また、現在パキスタン産薬用・香料植物ハンドブックの出版も同時進行で行っており、ネパールの本と合わせ同時期発刊(7月予定)になる予定。著者は、パキスタン側からはコハット工科大学・学長シンワリ先生とペシャワール大学のマブーブ先生、そして日本側からは私と吉川理事の4名です。

タイ・コブファイにて書籍が出来るまで

平成17年1月4日より、植物資源局のKuber Jang Malla氏を招聘し、今までの事業成果を紹介する目的でMalla氏と共にネパール産薬用植物ハンドブックのタイ国内(Kobfai, Foundation for Democracy and Development Studies)での印刷出版準備のため、北里大学薬学部附属薬用植物園研究室で原稿作成及び編集を行いました。原稿作成および編集終了後、平成17年3月下旬に約1週間タイ国内の出版業者Kobfaiにおいて、編集印刷作業を無事終えました。パキスタンのハンドブックについても、同時進行で編集印刷出版までの一連の作業を無事終えました。

以下に、書籍出版の道のりを紹介します。1973年より掲載植物の写真撮影開始し、2000年より分布図作成用データの構築をしました。

2001年11月に企画打合せを行い、2003年6月に執筆予定のネパール101種、パキスタン230種を決定し、これら全種について北里大学白金図書館及び熊本大学(矢原理事担当)での文献検索を完了。その後、ネパールのクベル・ジャン・マラ氏より108種のヒマラヤ産薬用植物写真撮影完了リストが再提出され、掲載植物の分布図作成のためデータ(標高、緯度、経度)の収集と入力作業を行いました。2004年5月13日には、6種が追加され114種になり、最終的には、掲載される薬用植物はHolly Numberの108種としました。2004年8月9日に植物画家・堀田ルミ子氏により表紙カバーに採用予定の表面及び裏面イラストが完成。2004年9月12日より、タイ国バンコクのKobfai Publishing Company出版担当者との打合せを行ないました。その後2004年末に表紙ハードカバー(表裏)のイラスト完成し、構造式の作図、当研究所会員の市村氏とのグラフィック処理作業及び編集会議を行い2005年1月にネパールからマラ氏が来日し、市村氏、渡邊高志3者による再編集作業、訂正そして総括を行いました。タイ国バンコク市内Kobfai Publishing Companyにて編集と最終調整(渡邊、堀田会員)を終えました。

2005年7月にはネパール産およびパキスタン産薬用・香料植物ハンドブックをそれぞれタイ王国(チュラルコン大学ブックセンター)とパキスタン(交渉中)の出版社から発刊予定です。 文責写真・渡邊高志(2005年3月撮影)



出版社 AMARIN Project の印刷工場内



Kobfai Publishing, Co.Ltdのスニー女史と著者